



# 第63回 日本神経学会学術大会

2022年 5月18日(水) ▶ 21日(土)

大会長：服部信孝 天使大学大学院医学研究科神経学 教授 会場：東京国際フォーラム

Perspective of Neurology in a centenarian society

幸福100年社会における脳神経内科の展望

～AI技術との共存に向けて～

## 講演情報

一般演題ポスターセッション(日本語)

### [Pj-094] 一般演題ポスターセッション（日本語）094

2022年5月21日(土) 13:15 ~ 14:30 ポスター会場 (東京国際フォーラム Eブロック B2F ホールE)

座長:岡田 和将(産業医科大学神経内科)

#### [Pj-094-4] 多発性硬化症治療におけるDMD反応性と免疫セマホリンSema4Aの関連の検討

甲田 亨<sup>1</sup>, 奥野 龍禎<sup>1</sup>, 木下 允<sup>1</sup>, 望月 秀樹<sup>1</sup>, 宮本 勝一<sup>2</sup>, 新野 正明<sup>3</sup>, 清水 優子<sup>4</sup>, 山本 真守<sup>6</sup>, 熊ノ郷 淳<sup>5</sup>, 中辻 裕司<sup>6</sup>

(1.大阪大学 神経内科, 2.和歌山医科大学 脳神経内科, 3.北海道医療センター 臨床研究部, 4.東京女子医科大学 脳神経内科, 5.大阪大学 呼吸器・免疫アレルギー内科, 6.富山大学 脳神経内科)

【目的】多発性硬化症（MS）の疾患修飾薬の選択肢は年々増えており、治療開始前に適切に治療を選択するためのバイオマーカーが切望されている。我々は血清中の免疫セマホリンSema4Aが多発性硬化症（MS）患者の約30%で高値を示し、Sema4A高値MS患者がIFN-β治療抵抗性を示す一方、フィンゴリモド(FTY)が有効であることを報告している。本研究ではグラチラマー酢酸塩(GA)、ジメチルフルマル酸(DMF)及びナタリズマブ(NAT)についてSema4Aと治療効果の関係について検討する。【方法】GA、DMF、ナタリズマブ使用中もしくは使用歴のあるMS患者（GA41例、DMF68例は再発緩解型MS、ナタリズマブ18例は二次進行型MSも含む）の血清と臨床データを収集し、血清Sema4Aの測定を行った。Sema4Aの高低値による臨床的特徴と治療効果（該当治療介入前後の臨床的再発回数、年間再発回数、EDSS変化率、画像的再発回数）を評価した。また、高次脳機能等についてBICAMS、BDI-II、FSS、FAMSによる評価も行った。【結果】GA使用例に関しては高値例及び低値例双方で年間再発率、EDSS変化率及び画像的再発の軽減が見られたが、画像的再発に関しては高値例で多い傾向が認められた。DMF使用例についても同様に年間臨床的再発率、画像的再発率の減少が見られたが、Sema4A高値で年間再発率、EDSS変化率が多い傾向がみられた。少数の検討であるが高値例、低値例ともにナタリズマブ投与中にはEDSSの変化や臨床的再発回数に差は見られなかった。また、高次脳機能等との相関についてはSema4A高値MS患者では抑うつ症状が強い傾向がみられた。【結論】GA、DMFについてSema4A高値MSでも有効であった。ナタリズマブについては少数例での検討であるが、Sema4A高値MSでも効果がある可能性が示唆された。